

次の文章を読み、設問に答えなさい。

犬に名前を与えるという行為は、犬を人間の側に近づけ、人間化を施すことである。ペットとして飼われるようになったとき、犬は純粋な動物であることをやめ、動物と人間との混合物^{フュルガム}へと姿を変える。固有名詞を与えられず、群れとして行動している狼やコヨーテは、人間にとって脅威以外の何物でもない。だが可愛らしい愛称を与えられ、カラフルな上着を着せられたり、優雅な金属の飾りのついた首輪をして人間の散歩に従っている一匹のヨークシャー・テリアは、飼主によって半ば創造された半人間であるといえる。

猫に名前を付けるほど難しいものはないと、詩のなかで書いたのは、T・S・エリオットであった。彼は『ボッサム叔父さん猫行状記』（一九三九）のなかでさまざまに奇妙な猫の名前を考案したが、苦勞した甲斐があつて、この詩集は今ではミュージカル『キャッツ』という舞台となって親しまれている。犬はどうだろうか。実は犬の命名もけっして好き勝手になされているものではない。そこにもいろいろな規則や禁忌手が横たわっている。

（中略）

犬の命名に一般的な規則はあるのだろうか。飼主は自分の犬に向かって、自由に思いつくままに名前を授けていいのだろうか。この問題を真剣に考えたのは、レヴィーストロースである。この人類学者はスタイナーやドゥルーズと違って、不用意に声を荒立てたりしない。きわめて冷静に対

象から距離をとりながら、さながら化学者が数学者であるかのように、分析を施してゆく。

『野生の思考』（一九六二）のなかで、フランスにあつては、まず犬に二通りの名前が与えられていると説く。

一つは、権限をもつ愛犬家協会の犬籍簿に登録されるときの名前である。それはその犬の生まれたケンネルや育成者の名前と、犬の誕生年に応じた頭文字で始まる名前との結合という形で表わされる。もし飼主が銘柄犬所有者の社会に加入したいのであれば、この連語からなる名前を正式名として受け入れなければならない。「正式名はきまった型にはまっている。正式名は生年と集団への帰属を同時に示すのだから、（……）民族学者が氏族名と呼ぶものと、順序名と呼ぶものの結合でできているのである。」レヴィーストロースはその例として、Top-Hill Silver Spray という名前を挙げている。「Top-Hill は育成者のケンネルの名前であり、ある年に生まれた犬はSS という頭文字の名前をその後につけられるのである。」

結局のところ、飼主が付ける名前は愛称にすぎない。では愛称は好き勝手に付けていいものかという点、必ずしもそうとはかぎらない。これを日本風に説明してみると、もしわたしが飼犬にポチとかシロと名付けたとすれば、わたしは世間から凡人として受け入れられ、それを認めてもいることになる。キングギドラと名付けたとすれば、奇人変人と思われるだろうし、思われないということになる。マルドロールと名付ければ、フランスかぶれの気取ったディレッタントと見做されるだろう。名前は名付けられ

た対象を語る以上に、それを名付けた側の人間のことを物語る。こうした事態から導き出されるのは、その犬の名が何であるかではなく、誰がその犬をそう呼んでいるのかという問いである。

こうした事実は、固有名詞は普通名詞と違って単なる恣意的なラベルに過ぎず、意味作用など持っていないという一般的な通念が、誤りであることを示している。犬の正式名が語るのは、その犬が特定のクラスに分類され、登録されているという意味であり、また飼主が付ける愛称は、その人物の属する階級と文化（教養）、個人的性格と嗜好を意味しているからだ。

しかしこの愛称も、まったく自由に付けていいわけではない。そこに三つの法則、あるいは禁じ手が存在している。

まず犬の名前は、一目で犬と判る名前のクラスに属していなければならない。競走馬や牧牛に付ける名前は不適當である。第二に、使用してもいい条件を備えていなければならない。具体的にいうと、これは近所の犬と同じ名前であってはいけないということだ。最後に、飼主の犬に対する考えや好みを反映していなければならない。この三つの条件を満たした名前だけが、眼前に貰われてきた（あるいは買われてきた）犬に与えるのに、ふさわしいのだ。

なーんだ、そんなこと、当たり前じゃないかという声が、どこからか挙がるかもしれない。しかし構造人類学とは、別段に奇を衒う思考ではない。人間が無意識的に過ごしている日常生活の根底にある構造を、冷静な距離のもとに抽出してみせるところから出発する学問なのである。そのために必要な基本語彙は二つ。あるものが別のものの一部分であるときを換喩と呼び、あるものがそっくりそのまま別のものに対応しているときを隠喩と呼ぶ。

この二つの言葉を理解したとき、レヴィ＝ストロースの分析は俄然面白

くなってくる。彼は犬の命名法を鳥のそれと比較するばかりか、勢いに乗って牛や競走馬のそれと比較してみせるのだ。

犬と鳥とはどこが違うだろうか。人は鳥に対しては、平気で人間と同じ名前を付ける。というより、「チッチちゃん」とか「チーコちゃん」といった具合に、人と鳥が愛称において重なり合うことも少なくない。だが犬のためには犬専用の名前が準備されていて、人間の名前を不用意に用いることはない。「俊輔」とか「隆明」という犬はまずありえないし、無理矢理そう名付けたとしても、周囲から顰蹙を買うばかりだろう。

これはひとえに、鳥が人間社会とは別個に独立した共同体を築き上げていることに関連している。アリストファネスの『鳥』からアッタルの『鳥の言葉』、安藤昌益の『自然真営道』に到るまで、人間は鳥たちの共同体を文学哲学の主題としてきた。鳥たちが人間に準えられるのは、人間とは異なり、隔たったところにいるからである。いい換えるなら、鳥は人間の隠喩たりうる。それゆえ鳥に命名しようとしたとき、人は夥しく存在している人間の名前のストック（記号学というラング）からそれを選び出すことができる。鳥の名前の集合は人間の名前の大集合の一部となり、全体に対する部分の関係、すなわち換喩を構成する。つまり鳥とは（いささかトリッキーな表現になるが）、換喩的名前をもった隠喩的人類なのである。

鳥と比べてみたとき、犬は独自の犬社会を形成しているわけではない。犬は家畜やペットとして充分に人間社会に組み込まれていて、その重要な一部である。これは換喩的關係である。しかもその地位は人間とは対等ではなく、より低い、劣った場所に置かれている。そのため不用意に人間と同じ名前を使用することはできず、犬のためにわざわざ準備された名前の集合体のなかから、適当なものを選びださなければならない。犬の名とは人間の名のパラレルな隠喩なのだ。後者が日常的なものであるとすれば、

前者は必然的に、人為的に作り上げられた非日常のものとなる。先に掲げたように、犬の名前に「メルモス」やら「ヘクトル」といった神話や叙事詩、演劇や小説の登場人物の名前が目立つのは、ここに原因がある。犬とは隠喩的な名前をもった換喩的な人類なのである。

『野生の思考』は愉しい知的発見に満ちた書物である。ついでにレヴィ・ストロースが牛と競走馬の命名について熱心に論じているあたりも要約しておこう。

牛は換喩的な非人類であるとされる。というのも、それは家畜ではあるが、犬とは違って人間社会に主体的に関わってはならず、モノと家畜の間段階にあるからである。人は牛を観察し、その毛色や性格、容貌に因んで命名する。犬や鳥のようにあらかじめ名前のラングが準備されているわけではなく、その場で描写的に口にされる言葉（記号学というパロール）に基づいて名付けられる。したがってそれは隠喩的な性格が強い。

競走馬はさらに興味深い。それは鳥のように独立した社会を形成しているわけでもなければ、犬ほどに人間社会に組み込まれているわけでもない。いくなれば隠喩的な非人類である。競走馬の命名において重要なことは、一頭一頭が厳密に個別化されていなければならない、その名前をもつ別の馬が世界中に一頭でも存在してはならないことだ。でなければ競馬新聞は成立しないだろう。そのため牛のように描写的な命名は曖昧であり、避けるべきではない。競走馬の名前は血統に基づく厳格な規則による部分と、文学的ともいえるべき恣意的な部分の結合から構成されることになる。

なんだか急に話が難しくなってきた印象があるが、要するに動物の命名は、その動物と人間社会との関係に応じてまったく異なった秩序法則に従っているものであり、けっして飼主の自由になるものではない。われわれは飼犬を好き勝手に名付けているようにみえて、実は見えないさまざまな

な規則に基づいて命名行為を実践しているのである。これが文化人類学の結論である。

人間がいくら個人的に実存に目覚め、行為と選択の自由を主張したところで、その思考と行動は帰属する社会の構造によって暗黙の裡に規定されている。構造主義の立場とは、そのようなものであった。それが神なき現代における人間の絶対的な自由を宣言したサルトルの実存主義と対立し、両者の間に激しい論争がなされたのが、今から半世紀前のパリであった。

レヴィ・ストロースはその後も百歳を越えるまで生き、日本神話に登場する因幡の白兔やアメノウズメをめぐる論文を次々と発表した。わたしはパリでその刊行シンポジウムに立ち会ったことがあるが、川田順造が中心になって和やかな討議がなされていた。やがて日本論集は『月の裏側』（中央公論新社）として、二〇一四年に邦訳が刊行された。

つげ義春に『峠の犬』という漫画がある。『ねじ式』のようなおどろおどろしい展開があるわけでもないためか、さほど注目されることなく忘れ去られている小品であるが、昔から気になっていたもので、ここに紹介しておきたい。

舞台は江戸時代の山村。主人公は反物の行商をして温泉宿を廻っている初老の行商人である。彼の家の隣には一年ほど前から野良犬が住み着いていて、五郎と呼ばれている。五郎はひどく愛想のない犬で、何の役にも立たず、犬仲間のいないせいもあって、たいていは庭先で虫や小鳥をかまっていた。行商人が旅に出るときには健気に街道の辻まで見送りに来るのだが、かといって別段、別れを惜しむといった風でもない。あるとき主人公は気紛れから、五郎のために川魚を土産に持ち帰る。だがそのときにかぎって五郎の姿は見えない。彼は十日前から姿を消してしまっていた

のだ。

それから一冬が過ぎ、主人公はふたたび行商の旅に出る。彼はふと出来心を起こし、これまで足を運んだことのない山道を歩いて、峠を越えようとする。すると思いがけないことであつたが、峠の茶屋で五郎と再会してしまう。彼は思わず「五郎」と呼びかける。だが飼主である茶屋の主人は犬をハチと呼び、一昨年行方不明になっていたのが、近頃になってヒョッコリ戻ってきたのだと説明する。ハチは五郎だった頃と変わりなく、庭先で虫や小鳥と遊んでいる。

翌朝、ひどい雨のなか、峠を下ろうとしてハチの無愛想な表情を認めた行商人は、心の内側で問うてみる。「五郎と呼ばれ、ハチと呼ばれ、何とも思つてはいないのだろうか」と。だが、犬の心はわからない。ただ一つ明らかなのは、峠の茶屋にいたこの犬が何の理由もないままに自分の村に住み着き、また峠の茶屋に引き返したという事実だけだ。自分もまた村に引き返さなければならぬのだろうか、主人公は自問する。「引返さな

ければならない理由はなにもないのだが」。

飼主がハチと呼ぼうが、五郎と呼ぼうが、この犬はいつこうに無関心である。彼はただ気の趣くままに二つの場所を交替して住んでいるだけで、人間の一举一動に対し、まったく愛想のない野良犬にすぎない。犬にとつて人間が付ける名前など所詮そのようなものではないかと、つげ義春はいいたげである。この犬が体現している絶対的自由を前にしたとき、あらゆる命名行為は観念の虚構として燃え崩れてしまうのだ。

パリで構造主義と実存主義との論争が白熱していた時分、一九六七年に、『峠の犬』は漫画雑誌『ガロ』にひっそりと掲載された。動物の立場からしてみればすべては人間の一人芝居ではないのかと、つげ義春の描く犬は、言葉にならない言葉で語りかけているように、わたしには思われる。

(四方田犬彦『犬たちの肖像』より)

設問Ⅰ この文章を三〇〇字以上三六〇字以内で要約しなさい。

設問Ⅱ 人間にとって「名付ける」とはどのようなことが、この文章をふまえて、あなた自身の考えを三二〇字以上四〇〇字以内で述べなさい。